

紀 行

海外研修記

古き城の街にて

—— マールブルクでの研修より ——

藤 本 淨 彦

一、研修生活の始動

一九八二年四月十九日、重い荷物をひきずり、西ドイツのフランクフルトから列車でライン川畔の田舎町マールブルク駅に降り立ったとき、出迎えるマルチン・クラッツ博士と四年ぶり三度目の対面に感動をおぼえる。

何せ、今回の長期研修のために過去一年間書簡をやり取りしたマールブルク関係者の中では、とりわけ家族ぐるみで付き合っている旧知の人だからである。「やあ、藤本よく来た。待っていたよ」とはずむ声で迎えてくれる笑顔は、筆者の不安を吹きとばす。と同時に、はじめてこの地を訪れて彼と議論し、彼の家族と共にすごした五年前の十一月一日のことが鮮やかに思い出された。

紺碧の空に新緑の光るマールブルクの町を、彼の車で筆者の定住すべき大学客員宿舍へ向う。古城を遠く正面に眺め、街を見下す高台に四八世帯の外国人研究者が居住している。小人数家庭用の住宅でも、五三㎡あり良好な設備のもとで向う一ケ年生活できることに安堵するとともに、これから新しい研修生活が始動すると思えば、心も引きしめる。その日の内に、クラッツ博士の奥さんに町での買物や交通網などの要領を教わり、夜には三

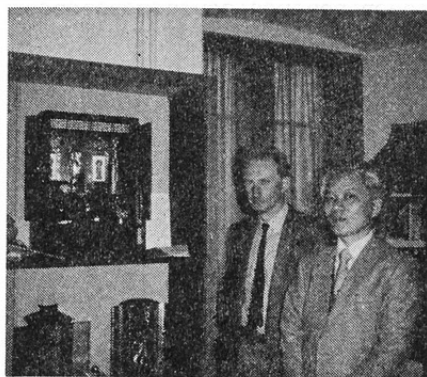
人の子供たちと共に自宅で歓迎パーティーを持ってくれるという完全な配慮のもとで、滞在生活が動きはじめたことは全くの仕合わせであった。——このような皮切りから、一年三ヶ月の滞在中ずっと快適かつ元気にすごした研修生活を、断片的に綴ってみよう。

二、研修での苦案

とにかくマールブルクで土着的生活に徹し多くの研究者たちと密度の高い息の長い間柄を持續したい——こんな欲張りに挑戦した。研修テーマは「キリスト教組織神学と宗教哲学の研究」とし、R・オットーとP・ティリッヒの研究資料が唯一整っているフィリップス大学マールブルクを選定した。この大学の神学部客員研究員として、神学部宗教史学科主任Dr. H・J・グレンシャート教授とDr. M・クラッツ、そして組織神学科元主任でドイツ・スカンジナビア宗教哲学学会会長のDr. C・H・ラッチョー教授の指導のもとで、大学の授業に出ながら、R・オットー資料のある宗教資料収集研究所とP・ティリッヒ資料のティリッヒ資料所を利用することが目的となる。

研究の場所

筆者は、Dr. クラッツ主任の宗教資料収集研究所四階に入室



日本浄土教展示室にてDr. クラークと筆者

を与えられ、自由に研究施設を活用できた。個室は落ちつき、親切な秘書I・ハルティエ夫人の助力もあって、一年三ヶ月間を常に自由に研究できたことは喜びであった。

この研究所は、R・オットーの学的精神にもとづいて世界諸宗教の儀礼・文化的諸品と圖書の収集とを積極的に行ない、学生はじめ外国人研究者の出入りも多い。勿論、日本仏教、浄土教の諸品や圖書も収集されており、滞在中にはそれらの解説文や展示方法などについての指導を求められた。このことは、筆者にとって大変良い修練になると共に、反

面、欧文で解説・論述された法然浄土教のものが皆無であることに情けない思いをした。

奇縁

生活をはじめてすぐに私講師として出講しているDr. ラウベに再会できたのは奇縁。というのは、彼は七年近く前に天理大学でドイツ語外人教師として三年間滞日した。丁度そのころに、筆者らの研究会に時々参加していたのが、彼だったのだ。

彼の授業のあとには、計五年以上の滞日で身につけた上手な日本語をまじえて音楽史のDr. である奥さんとも話してすごす。彼の専門は田辺元の哲学であり、議論にはこと欠かない。とりわけ、「異国でのクリスマスと正月は淋しいものです。我家ですごしなさい」と、一家に招待された幾度かの訪問は常に心なごみゆくものであった。とくに、奥さんのお母さんと同居しているという、ドイツではめずらしい二世代同居家族の様子は、いろんなことを筆者に教えてくれた。

授業に出ることによって新しく知遇しえたのは、Dr. G・カイル教授である。宗教哲学の課題として「教義学」や「存在論」を展開する思考に、筆者は心を奪われてしまった。彼の授業には三学期とも講義とゼミに出たが、筆者のイメージとしての典型的なドイツ大学

教授であると思う。聴講を願ひ出た筆者に「私はK・バルトの本でアミダ・ブッディスムスのことを知った。いろいろと教えてほしい」と語りかけてくれる。冬学期には、「これは今講義している『教義学』の講義録だ」といって三〇〇頁のタイプ製本を筆者にくれる。このように、ドイツの教授たちは休暇中に次の学期の講義録を完全に作りあげ、それをもって迫力ある最新の授業を展開する。

各学期末には自宅に招いてくれ、奥さん共々親しく話したものである。拙宅に招待した折に「自分は今、日本料理を食べているのだから、この箸で最後まで食べるのだ」と子供のように頑張った仕草は忘れられない。

神学生のレヒが「Dr. キタヤマ教授を知っているか」と、滞在間もない筆者に尋ねてくる。一方、七月にはW大のM教授より北山淳友師の調査依頼の連絡が来た。以後、筆者の身を置く研究所で助手を勤めマルブルク大名管教授として、一九三〇〜四五年の間活躍した北山淳友の調査に関わることになる。浄土宗派遣研究生としてドイツの大学で研鑽し学位修得し、教授陣の一人として研究教授活動したこの人物の調査探究は、筆者に計り知れない励みと活力とを与えてくれた。このこ

とは文字通り奇縁であり幸運であった。

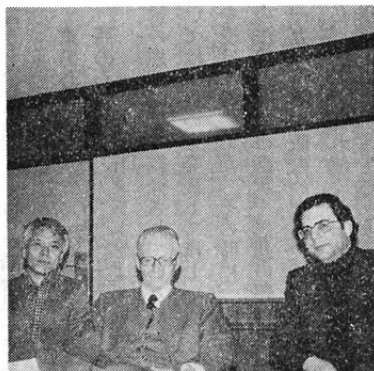
老教授

と共に

古いドイツの大学教授タイプそのままに思える七二歳のDr. C. H. ラッテヨー教授は、「浄土教の立場でP・ティリッヒを研究するのは興味がある。一緒に仕事しよう」と言ってくれる。六月中の毎週夕方二〜三時間ほど自宅で、彼の弟子のレップやレルヒそしてイギリスからの研究者ホワイト達と共に、初期ティリッヒ文献を指導してくれた。教授の質問はいつも、「このような問題は浄土教ではどうか？」の連続であり閉口した。しかし、その質問を通して浄土教に対する興味にふれうる。夏休み明けに、「宗教概念について——初期ティリッヒ思想と日本浄土教——」という二〇枚のレポートを教授に提出した。大変に喜んでくれ、「その内に指導するから」と。

十一月に入って、Dr. ラウベが「パーセルのDr. F. ブリー教授が京都学派の宗教哲学について大著を出した。それを共同して批評しよう」と、ラッテヨー教授が計画している」と伝えてくれる。言われるままに、筆者も仲間に入って三人で討議を重ねること数回。ヨーロッパ的な学術批判の厳しさを改めて経験した。教授いわく、「君の考えを明確に出して、

厳密に批判しなければならない」——言われてみれば当たり前だが、どうも日本的書評はこの「明確さ」と「厳密さ」とを問わないようである。「著者の意見に対する君の指摘は、私に理解できないのだが、詳しく説明してほしい」などと言われると、筆者も汗をふきふきあの手この手の説明をせざるをえない。もう投げ出そう、と何回思ったか知れない。



大学講師控室にてDr. ラウベ(右)と共にDr. ラッテヨー教授(中央)と共に

厳格な指導

一月下旬にラッテヨー教授からの電話で「先に君が提出したレポートを指導したいので家に来るように」と。不安と期待の交わる思いで教授宅へ。奥さんと三人でお茶やケーキをごちそうになりながら話したあとで、「さあ、仕事を

しよう。書斎に來なさい」と。元來、教授なる者の書斎には興味がある。重厚な家具、そして書棚に哲学・神学関係の貴重な原書類が揃っており、ゆったりとした落ちつきをさもし出す彩光などまさに学者の仕事場である。

レポートの一行一行を丁寧に読んで、「良くなる」または「わからない」と明確に指摘し、わからない点については釈明を筆者に厳しく求める。その厳しさには殺気だつものがある。レポートの内容はP・ティリッヒと法然の宗教思想で、教授はティリッヒ研究の第一人者としての深い定見でもって洗いざらえに質問を浴びせてくる。筆者の応答も殺気立つが、一方、これぞドイツの学の骨頂だと思いつつ一所懸命である。「これら六つの質問に添ってもう一度考えなさい。三月中に再指導したい。君の思考方法は、極めて日本のものだと思う。その点が貴重なのです」との教授の講評に、心身ともにホッとする。

書評の方もどうか格好つけ、レポートも再考しタイプ打ち直しを終え、三月中旬に教授宅へ持参した。「論の流れは大体理解できる。しかし、君自身の意見として語っていることは、一体何に根拠を置いているのか」ととても厳しい。ヘーゲル、キルケゴー

ルそしてハイデッガーの著書名を筆者が列挙すると、教授は即座に目の前で該当資料を開き、「ここでキルケゴールが論じていることを君は根拠にしているのか？」などと確認する。幸か不幸か、そのような検証にも答えることができ、心底ホッとする。そこに極めてドイツ的な原典主義の厳しい伝統を味わうことができた。そのうえ、ドイツ宗教哲学と組織神学の学術誌にそれを掲載すべく推薦しようといわれ、まさに瓢箪から駒である。

レポート指導が終ると、今度は「君に個人指導をするから、テキストを決めなさい」と言う。わが耳を疑いながら、筆者の関心事と研究の経過を話すと、「なぜ、神学と浄土教への興味が生じたのか？」また「ティリッヒ神学思想のどの点への注目なのか？」など集中的質問を浴びる。筆者は、「信仰の学としての神学と浄土教学への関心」「世界諸宗教における宗教的原理としての着想をP・ティリッヒに看取し、その着想における浄土教研究の必要性」などを強調し応戦する。それは、筆者の意識を確認するような厳しい口答質問のようですらあったが、以後、毎週一回定期的にラッチャー教授宅でのP・ティリッヒ思想講読会が四月中もたれた。毎回の訪問

のあと、やっと Schuler〈学徒〉になりえたかなと思いつつ、スカッとした気持ちで教授宅から町まで歩く石畳の坂道は、言わく言い難い充実感をもたらした。それは、研修という学的営みを目的とする筆者にとって最高の場面であったように回想される。しかし、実を言うと、この間ずっと胃の痛む思いであった。

東の心 西の心

滞在間もない六月下旬に研究所で開かれた仏教ゼミナールにあたり、Dr.クライツより「禅仏教や親鸞の思想はよく紹介されているが、法然については少いので発表してほしい」という勧めを受けて発表した。その時に、ドイツ語圏での法然の著書の翻訳や思想の紹介は、なんと一九一〇年出版のハンス・ハース著「阿弥陀仏、我らの隠れ場——日本浄土教の理解への記録——」という一八〇頁の単行本以外に見当らなかった。この著書では、法然・向阿・親鸞を扱かい、浄土宗史と教えの簡単な紹介・法然の「浄土宗略抄」「黒田の聖人へつかわす御文」「一枚起請文」とがドイツ語訳され解説されている。この出版以降にドイツ語で本格的に翻訳紹介されたものに会え得ない。このような事情からドイツにおける法然及びその思想の研究と情報は、禅仏教や親鸞

思想に比して、格段の遅れをとっている。

そんな現況のなかで、宗教史学者Dr. M・クライツと、法然上人の「一百四十五箇条問答」をドイツ語に翻訳する仕事にとりかかった。彼は、数年前に来日したことがあり、日本の宗教への大きな興味にもとづいて熱心に取り組んでくれる。十月より毎週火・金曜日の午後三時から四時間にわたり、二人で議論し翻訳をすすめる。彼は、残念ながらほとんど日本語はできないが、筆者の提示する私訳に対しては、東と西の差異を感じさせないところでもって洞察していく。

彼との議論や解釈を通して生起する問題は極めて新鮮なものであり、ハッとさせられる。我々が母国語として読む限り気づくことのできない問題の発掘に、改めて驚異の念を自ら抱く。それとともに、疑問の点が理解できるまでは研究所の図書を総動員させて調べあげる学的手続きと、議論になると双方の合意点までねばり強く対応する態度とにどっぷりと浸った仕事ではある。それらの例を挙げうる紙面がなく残念であるが、単なる言葉の置き換えではなくして、具体的宗教の中で東の心と西の心貫ぬく世界を開拓しようという作業であると思っている。勿論、投げ出

すことなくこの作業を進めるDr.クラーツには、ただただ頭の下る思いである。

学会

瞥見

研修に関わって対照的な運営の二つの学会に参加することができた。全欧州日本学会とドイツP・ティリッヒ学会とである。

前者は昨秋九月に四日間オランダのハーグで開かれ、少くとも三〇〇人以上の参加者と七つの部会で催された。ほぼ全ての学的分野を部会に持ち、一人四十分の持ち時間で六八名の発表があった。筆者は、Dr.ラウベ夫妻と共に第七部会の「宗教と哲学」に出席した。

この部会では、白土わか大谷大学教授の招待講演をも含めて十四人の発表があった。内訳は、西田及び田辺哲学二、富永伸基二、日本古代宗教及び神道関係四、親鸞及び浄土真宗二、禅一そして新宗教関係二である。

メンバーは、ほとんど日本語の原典が読めて日本語会話ができる。若い日本人研究者が一生懸命に英語で質問すると、流調な日本語で応答する光景は、この学会ならではのものである。その運営も日本での学会と同様で、何やら安心感が走るが――。日本の各分野の研究者も、彼ら日本学関係の外国人研究者の発表を通して、発想と疑問とを大いに学

ぶべきではなからうかと思われる。

後者、P・ティリッヒ学会は、今年四月に三日間にわたって北ヘッセン州教会の研修センターのあるホフ・ガイスマールで開かれた。先述のDr.ラッチャールが会長であり、彼に勧められて参加した。会員八〇余名の参加者はセンター内のホテルに泊り二泊三日の学会生活を共にする。会費はそれらをすべて含めて、一般人九〇DM(約九千円)、学生または失業者半額である。北ヘッセン州教会のすべての機能がここホフ・ガイスマールにあり、瀟洒な古城を中心に多様な建物群、ゆったりした池をめぐる森林散歩道、これら全体を研修センターは有している。それをとりまく形で、福祉施設と病院などが並んでいる。勿論、西ドイツではキリスト教が国教に近い位置づけを有しているので、これほどの施設を機能的に用意しうるのであるが、われわれ日本の現状から言くと、まさに羨望に堪えない。

「祈り・経験・形態」という総合テーマのもとで運ばれた。全体討議の基調発表四人は、一時間半の発表に対して一時間の質疑応答をこなさなければならぬ。学生をはじめ各職層の参加者は、各々のティリッヒ理解にもとづいて質問する。牧師や教員、医者や主

婦など老若男女ともに議論の中心役となりうる光景は、これぞドイツ的学の伝統であろうと一人勝手に思った。それらをふまえて、さらに分科会でつづこんだ討議となる。



P・ティリッヒ学会全体討議光景

三日間を同宿し意見を交わすという方法は極めて有効である。初めての日本人参加ということで、筆者も親切にしてもらったが、とくに、夕食後の日程が終るとみんな自前でビールやワインを求めて、ホールで饗宴(シンポジウム)の輪ができて更夜にまで及ぶ。この饗宴は魅力ある雰囲気で、飲むほどに意見が冴え、話題の進展をみうる会話に引きこまれてしまった。最後の夕べは「フルートとチ

エンバロの室内楽鑑賞」というように、非常に工夫された運営であった。基調発表者たちの全力投球と全体討議の熱気ある議論とは高度な学術世界を造り、飲むほどに広がる意見交換の饗宴は人間的な深さをも出し出す。

これら二つの学会の詳細も述べたいが、残念ながらここでは割愛する。

三、学生たちと学生気分

とにかく学生気分ですごしてやろう——という思いで三学期の間を通して授業にも多く出た。限られた条件とはいえ、単身生活ゆえに付き合ひも深まり、友人としての学生たちのおかげで比類なき経験を持つことができ、筆者の研修にあたつての円滑油となり内容あるものになったと断言できる。

残念ながら、例えば、ドイツという風土でドイツ人によってドイツ語でドイツ語を教わってみようという興味で覗いたドイツ語学級の友人、また、ひよんなことから知り合ひ、ワインをさげては毎週拙宅に出没するようになった、ドイツ人神学部学生にみられる、孤独なる自由」に陥こんでいる学生生活などについて語る紙面がない。ここでは、研修に関わる範囲での学生との日々を紹介したい。

生活と

気質

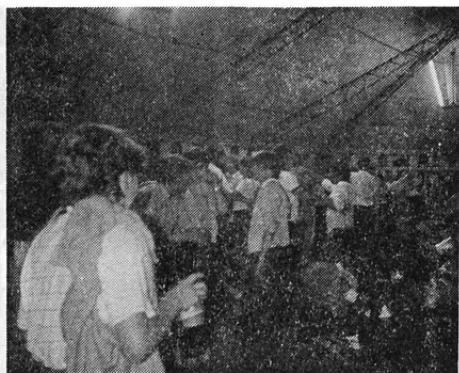
M・レップとK・H・レルヒとは、先述の神学部組織神学科Dr.ラッチャー教授の弟子であり、神学博士論文と修士論文の終了者である。レップは二十九歳で、昨夏に博士論文を提出したあと、現在は牧師補としてフランクフルトの教会で実習しながら、正牧師職採用の二次試験に備えている。一方、レルヒは今年四月に修士論文を終えた二十五歳で、レップを先輩として慕っている後輩である。このような先輩後輩の間柄は現在の学生には少いようで、その意味で彼らはドイツ学生気質の原像のようなものを感じさせる。ドイツの大学生は、日本では想像できないほどに、衣食住に徹底して質素で、自分自身の自由な時間をこよなく大切にす。学問的営みは、このような生活と意識から生れるという自信が彼らにはある。

学生食堂(メンザ)で二人に会い、その折ごとにお茶を飲みながら話し込んだり、神学部校舎のすぐ近くのレルヒの下宿へ行ったりする。彼らも再三よく拙宅へ来ては酒宴(ヘシンポジウム)を開いたものである。彼の下宿は、一〇帖ほどで洗面所付、共同シャワー・トイレ付で家賃は庶費と光熱費込みで一八〇DMという格安。外食生活で毎月六七〇DMの要

学金でやっていけるという。彼には郷里の近くで看護婦をしている許婚者がおり、毎週末には彼女が来ては泊っていく。ドイツの大学生には、異性と共同生活をしている者が多いが、それは経済的理由によるともいわれる。

大学祭

夏学期末の六月の終りに、彼らに誘われて、大学が主催し市民と共に楽しむ夏祭り(Sommer Fest)をのぞいた。大学本部構内の広場に音楽堂と屋台が設営され、ビールとパン・ソーセージなどの飲食物が売られ、屋内外ではドイツ民謡団・ジャズからクラシックまで、そして外国人学生のお国自慢音楽やダンスで賑やかに催される。入場料は五DMで「これは福祉への献金だ」と説明してくれる。身動き出来ないほどの人々の波の中で、みんなビールコップ片手にワイワイおしゃべりしたり音楽に聴き入ったり。筆者たちも、夕方から深夜までビールを水の如く飲みつつドイツ民族音楽、クラシックそしてアフリカ学生の民族踊りなどを楽しんだ。学生は恋人と共に参加し、夜明けまでビールを飲み音楽を聴き踊り騒ぐための祭りである。恋人と共に現われたレルヒに、「この騒ぎはいつ終るのか?」と尋ねると、「さあ、明け方まで続くだろう」とケロリとしている。



大学夏祭り光景

冬にはダンスパーティーで、このような祭り「Fest」を年二回夏冬に一晚とことん飲んで踊って話してすごす。それが入場料を取る大学行事であり、学期末の一日をすべてから全く解放されてすこす知恵を持ち合わせているドイツの大学関係者と市民とに敬意を抱く。とともに、日本風のいわゆる学園祭はどうか少しでもましにならぬものか——との思いが走ったのは偶然ではない。

議論・研

究・勉学

ある秋日、レップの抜刷論文「P・テリッヒの呼応の方法」について批評を求められた

時に、筆者は「呼応関係〈Korrelation〉と弁証法〈Dialektik〉とは一線を画すべきである。それが明白でない」ことを指摘した。すると二人から「主観〈Subjekt〉と客観〈Objekt〉という構図においてそれは同じであり、我々は常にこの構図から思考する」という答えが返ってきた。つまり、ヨーロッパ的思考は常に主—客の構図を離れないので、呼応関係や弁証法が成立するといっているのである。筆者は、いわゆる相依性の縁起の考え方を説明するが、彼らはきまって「それなら、主体性ということはどうなるのか？」と問う——この議論は二—三時間に及んだが、結論は出ない。このような一対二の延々たる議論はしょっちゅうであった。

冬のころ突然、レルヒが「これは自分の修士主要ゼミ論文であり、読んで指導してほしい」といって、P・テリッヒのサクラメントに関する二〇〇枚の論文を製本して持ってきた。このことは、先のレップの論文とともに筆者にとって大きな刺激となり、彼らに負けじと思つて、筆者も学期末にはドイツ語文レポートを書いては意見を求めたものである。しかし、レップの抜刷論文には多少の批評を加えることができたが、何せ長い論文の

レルヒに対して滞在中に批評の機会を持ちえず、今にもその借りを返したい思いである。

彼らドイツの学生と話すとき、「ドイツの書籍が高いので仲々購入できない」と嘆く。それでも、よく立ち寄ったレルヒの部屋には、選びぬかれて購入したらしい神学や哲学関係の書物が多く、その上、毎学期の議義筆記録とレポートがファイルにして二〇冊以上並んでいる。その数冊をみせてもらったが、上手にノートして自分で工夫したまとめがしてある。授業などでの学生の筆記力には目をみはるものがある。それは、日本のように「友人と連れで講義に出る」のではなくして、「自らの選択の責任で講義に出る」という自由なる孤独の習慣のためのものであろうと思う。

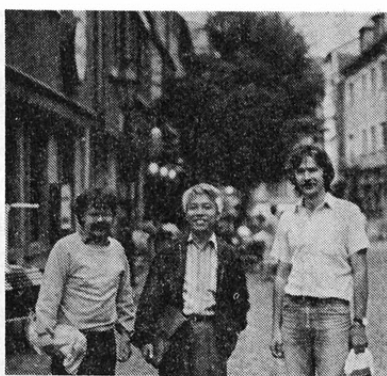
学生の

ところ

「ギリシア正教の聖地アトスへ連れて行ってほしい」と、この二人のドイツ人神学生に所望されたときには驚いた。今年四月中旬より二週間、三人でアトス巡礼をした。全くの貧乏旅行に同伴し、ウーゾやレチーナを飲みディオニソス的に議論の花が咲き、アテネのプラカ地区を闊歩し、また、アトス霊峰（二〇三三m）へ痛い足をひきずりながら日帰り登頂した折の彼らの親切と心根、その他諸々は筆者

にとって生涯忘れぬ体験である。

六月に帰国する予定の筆者としてどうしても尋ねておきたいことを、ギリシア最後の夜に口に出した。すなわち、「なぜ君たちは私にギリシア旅行を所望し、かくも親切に仲間にしてくれるのか」と。彼らは「この旅は藤本が帰国するにあたっての修学旅行、我々の



レップ(左)とレルヒ(右)と共に

気持の旅だ。我々にとってうれしいのは、あなたが仏教の聖職者でありかつ大学教授であるのに、滞在中いつも我々の意識の中に入れて教えてくれたり行動してくれたことだ」と。——この言葉こそ彼ら二人の学生の本音であろうと思われ、返す言葉もなく受けとめた。これらにまつわる一年有余の諸々のこと

も、残念ながら割愛せざるをえない。

四、忘れえぬこと

マールブルクでの研修の日々は、忘れえぬ出来事であった。しかし筆者には、それ以上に忘れえない個人的な二つのことがある。

七年前の二月に本学教職員と学生の団体で筆者はインド・スリランカ旅行に連れていかれてもらった。確か、二月二十六日ラジギールの宿では団長の故恵谷隆戒元学長と同室であった。その折に、恵谷先生は筆者の研究歴と学的関心とを尋ねられたあとに、「それなら君、是非ドイツに留学したまえ。とくにフンボルトで行く」と良いと言われたのには驚いた。以後、故先生のこの言葉は、筆者には大いなる課題であった。このたび、本学海外研修員として西ドイツ・マールブルクで、それを実現できたことに無上の喜びを感じる。

筆者が発する一週間前に、たまたま、大学で筆谷稔教授にお会いした。例の如くお元気なお声で「若い時に外国で勉強するのは良いことだ。わしなんかは、もう体に用心しななければならぬ身で……」とおっしゃり、「これはほんの気持や。銭別と書く」と別れっぱなしのようになるから、そや、Auf Wiederse-

henとしよう、これなら再び元気で会おうということだから」といって、サツと毛筆で“Auf Wiedersehen”とお書きになった金封を頂戴した。そして「別にお土産は欲しゅうない、まあ、西ドイツの社会学の現況を知らせてや」と結ばれた。この一連の会話は、出発直前の筆者の緊張を解いてくれた。——今や、筆谷教授と“Auf Wiedersehen”をしようにも、また、西ドイツの社会学の現況を伝えようにも、全く術がないことは悲しい。長いようで短かった一年三ヶ月間のことが、今、公私ともども一挙に頭の中を去来する。何はともあれ、このような機会を与えて下さり無事研修を終えることができたのは、佛教大学当局および関係の方々のお蔭である。改めて各位にお礼申しあげて、この報告を閉じることとする。(22・7・1983)

付①研修のもう一面については、佛教大

学内報'83・3～5月号または中外日報'83・4・24記事参照。②北山淳友については、拙稿「北山淳友論—孤高なる佛教哲学者—」大正大学西哲研究室刊『比較思想』第七号('83・6)を参照。

(ふじもと きよひこ 文学部助教授)